

## 第19回 日中戦争史研究会

2014年7月12日(土) 13:00～ 愛知大学於

参加者(五十音順、敬称略)

大野絢也(愛知学院大学大学院)、岡崎清宜(名古屋大学)、菊池一隆(愛知学院大学)、呉米淑(愛知学院大学大学院)、張鴻鵬(名城大学大学院)、橋本浩一(大阪府守口市立第三中学校・夜間学級) 馬場毅(愛知大学)、古澤文(愛知大学)、森久男(愛知大学)

### 報告1: 橋本浩一(大阪府守口市立第三中学校・夜間学級) 福建事変時における日本政府の対応に関する一考察

【質疑応答】(司会: 森)

森:

福建事変をめぐる諸問題、そして日本との関係について、臨検封鎖問題、抗日論調に焦点を合わせて報告していただきました。従来、福建事変に関しては人民政府と共産党との関係、あるいは蒋介石の南京政府と人民政府との関係で取り上げられてきましたが、日本との関係を正面から取り上げて論じた試みはあまりありませんでした。

只今の報告について事実関係、コメント等ありましたらお願いします。

馬場:

日本とのかかわりという点で興味深く聞かせていただきました。

日本にとっての福建省の位置付けについてお伺いします。1900年に孫文が惠州蜂起を行った時、最初、台湾総督府の児玉源太郎が支援をしました。内閣が伊藤内閣に変わる頃です。要するに、孫文を支援しているのは日本の台湾総督府であって、日本の勢力が福建に拡大してくると、英仏列強による干渉を恐れるが故にそれを抑制していきます。そして結局、台湾総督府は援助するなということになりました。その時期、1900年代の福建は日本政府にとってどういう位置づけにあったのでしょうか。

幣原外交の時は基本的にはイギリスを始めとする列強との協調があったとおもいます。そして満州事変発生後、幣原外交がおわり、英仏に対する配慮が必要なくなります。英仏に対する配慮は後景へ退き、もっぱら中国国内の抗日、反日に対する関心が向くようになっていったと考えて良いのでしょうか。

橋本:

まず2点目のご質問についてです。2ページの問題意識の部分で書きましたが、欧米列強への影響と言う点では相当アメリカ、イギリス、特にアメリカの動向は気にしていたと考

えます。広田外交の時代、重光葵が対中政策をやっていましたが、彼はどちらかというところアメリカの中国に関わる直接的・間接的関与に非常に配慮していました。この福建問題についても、欧米がこれに関して何か入ってこないように非常に気にしていたようです。注24に書きましたが「昭和8年11月30日「福建独立政府組織ニ関スル件」（記録「福建独立運動関係」）では「右宣伝（福建独立への「日本関与説」）ノ欧米方面ニ及ホス影響ニ付テモ等閑ニ附シ難キモノアルヲ以テ本省ト在支各館トノ連絡ハ勿論在欧米方面各館トノ間ニ於イテモ十分ナル連絡ヲ保持シ他ヨリ乗セラレサルコトヲ期スル」ということで実際、この時期に航空・鉄道問題に関するアメリカの動向に非常に神経をとがらせて懸念を抱いていました。国内問題はもちろんですが、重光の立場からすると、このころ地域主義的な、これは日本史研究ではよく言われますが、東アジアにおける日本の立場を明確にし、欧米を入れこませないというものでした。そういう意味での日中提携を模索しながら、一方で英米との決定的対立をせず、できるだけ排除していくという方向が福建問題にも現れていると考えます。重光が外務次官になったのは1933年5月末で、彼の立場がこの後、相当反映されたといわれています。この問題からも重光の考え方が見えて来るかと思えます。

日本政府にとっての福建省の問題については、当時の外務省や軍部中央のトーンと台湾軍や総督府のトーンは若干違ったと思います。台湾に重きを置いていた人びと、台湾軍司令官であった松井石根、日本と人民政府の間に入ろうとした和知鷹二も大アジア主義の中国への普及に動きだしていきます。アメリカの動向、航空・鉄道の問題からすると、元来、一定勢力圏とされていた福建省にアメリカが入って来ることを懸念し、実際それを阻止しようということからすれば、日本政府は福建省をそれほど軽視していたとは言えないと考えます。

菊池：

一般的な通説では、日本と人民政府の交渉、蒋介石と人民政府の交渉、この三者が交渉をおこない、日本軍と蒋介石の裏提携の挟み撃ちをしたということですが、それに対してはどうお考えでしょうか。

台湾人と福建人の関係で、福建人民革命政府の反蔣抗日的な活動が思想的に揺れ動かされる問題があり、日本軍はかなり緊張したと思いますが、実際はどうだったのでしょうか。

今回の発表では日本側は外交文書を、中国側は新聞記事が用いられています。台湾の場合はどうでしょうか。台湾国史館の外交文書、国民政府文書は見たほうがよいと思います。それと日本の外交文書には英文資料もあると思いますが、これは見えていますか。

橋本：

英文資料については、外務省記録の中に諸外国の動向というファイルがあるはずなのですが、これは消失ファイルとなっていてありません。日本の新聞記事の中に英語やフランス語記事が少し添付されていることはあります。ただ、まとまった形の英語資料は日本に

は私が把握する中にはありません。もちろんアメリカ、イギリス本国にはあるでしょうけれども。

菊池：

議会記録は愛知学院にあるようです。

馬場：

イギリス外務省 FO の資料は東大にもあります。愛知学院の資料は前後がつながっていないものもあります。

橋本：

台湾側資料の不足は痛切に感じています。それは今後の課題にしたいと思います。

日本と蒋介石との提携・挟み撃ちがあったことについてですが、日本の軍艦がアモイに入るのも、国民政府軍が入るのも、それは提携というよりは、あくまで国民政府軍による空爆や軍事突入、それに対する居留民保護のため入っていったと考えられます。提携で鎮圧されたとは言えないと思います。これは共産党、西南派との関係の中で広がりをもつことができなかつたが故に、南京国民政府の最終的な軍事力にたいしても進行を許さざるをえなかつた。また広東や広西省の動きによっては、蒋介石も手を出せない状況になる可能性もあつたと思います。一般に言われる挟み撃ちであつたかどうかというと、今の私の考えではそうとは考えません。

台湾籍民の問題は重要であると思います。外務省警察の福州総領事館、アモイ総領事館の資料、外務省アジア局の満州や中華民国の人口統計によりますと、アモイ管区に日本人とされる人たちが 9885 人おり、その内の 9500 人ちかくは台湾人でした。このような人口割合からみると台湾籍民の動向は重要で、思想的な問題があると気にしていたと思います。ただ、福建人民政府側がこの台湾籍民をどう位置付けて、考えていたのかについてはまだ見ていません。台湾籍民の意識について人民政府側からみることを今後の課題にしたいと思います。

森：

「はじめに」では、人民政府が「抗日救国」というスローガンで蒋介石の南京国民政府に対抗しようとしたということで、対日関係の重要性があるという趣旨であつたと思いますが、本論の報告では逆に、人民政府が日本と提携しているのではないかということが主に考察されています。そうすると人民政府の「抗日救国」というスローガンは全くの看板倒れで、たんに蒋介石に対する嫌がらせとして行っているだけなのではと考えてしまいます。人民政府に「抗日救国」という考えが本当にあつたのでしょうか。

対日関係について疑われているのですが、日本との連絡というのを和知鷹二がやろうと

していたようですが、実質的な関係はあったのでしょうか。

橋本：

「抗日救国」を挙げたにも関わらず、日本との関係が取りざたされていて、実際にそうした接点もありそうということですが、まさにその通りだと思います。ただし「反蔣抗日」の反蔣の意識だけで、抗日はある種の看板なのかとうと、実際はそうでなかったと私は考えます。共産党や広東、広西省との関係を模索していく中で、抗日や反蔣の側面を共通項としてどうひろげていくのかを模索しつつ、一方で台湾が目にある中で、日本の存在は現実的な脅威にもなっており、大きな戦略、小さな戦術の問題も含め具体的ところで矛盾があったのではないのでしょうか。たとえば人民政府の軍事的背景である、十九路軍の抗日意識が高かったという状況、あるいは第三党が主要な勢力を占めていく中、指導者間での統一性の問題があったのではないかと思います。和知鷹二が台湾総督府と人民政府との関係を、すべてが一致して何かの方針として進めていこうとした訳ではなく、個別の判断の中で、でてきたものもあると思います。そこに遊離や乖離が発生しているという、事実があったとしても、抗日は反蔣のための付け足しであるとは捉えていないです。というのもこの後、結集したメンバーは第三勢力民事派としての活動を継続し、その活動が抗日意識を中軸に展開されたものと考えられるからです。

森：

何か政策として具体的な反日の措置などはありましたか。

橋本：

短期間でしたので、一般論としてのスローガンのもの、たとえば反日、満州事変反対などがありました。ただ非常に融和的で、またそれを基に福建の状況に介入されるのを回避するための行動を取っていて、互いに干渉し合わないという状況でした。具体的に何か事をおこしたということはありません。

森：

福建事件のあと、中国共産党が組織した紅軍抗日先遣隊というのがありましたが、これも看板だけで実際抗日をしようとする本心はなかったと思われまます。こうした状況は当時の中国では相当広く見られます。表面的に抗日というスローガンを聞くと、それを目的としているように見えてしましますが、そこをどのように評価するかは、とても難しい問題だと思います。

本日の発表では、福建事変後の日本政府、外務省の対応、また陸軍、海軍などさまざまな側面から考察されています。そして中国国内における対応として、福建事変に反対する勢力が日本軍に対してどのように展開したのか、細かく検討されていたと思います。ただ

し「おわりに」のところで総合的にまとめる部分が欠けているのではないのでしょうか。さきほど述べましたが、反日だったのか、日本が援助しているのではないのかという論調があったけれども、本当に日本は関与していたのか、そうした点を「おわりに」のところではっきり言及された方が良かったと思います。

軍との関係ですが、陸軍と海軍では問題意識が相当違います。日本陸軍は満州国の問題、満州国に関連する限りでの外交問題には非常に強く意識をもっていますが、福建は海軍の縄張りです。ですから日本の軍部といっても関心の程度が違っていると思います。日本陸軍の福建事変への対応でも、だれが陸軍大臣であったかどうかで違ってきます。荒木貞夫、皇道派が陸軍の主流であったのころは反ソ親英米で中国とあまりトラブルを起こさないという政策です。それが、1934年1月林銑十郎が陸軍大臣になると、統制派が次第に勢力を盛り返してきます。統制派は反中国という性格が強いです。ですから日本陸軍の立場、対中政策も時期によって相当違ってきます。その点も加味して福建事変に対する日本軍部の対応を考察されるとより立体的になるとと思います。

## 報告2：岡崎清宜（愛知県立大学・愛知大学非常勤講師）

### 中国幣制改革と補助貨幣

【質疑応答】（司会：森）

森：

中国の通貨制度の中でも少額貨幣に着目して考察されている点が従来にない、新しい観点だと思います。また、理論的道筋で啓発される部分もありました。中国の骨董屋には古い紙幣やコインが非常に種類豊富に置いてあるという印象を持っています。

只今の報告に対して、事実関係の確認、コメント等ありましたらお願いします。

馬場：

レジュメ図3にある理論値というのはどのように出すのでしょうか。

岡崎：

「図1 戦間期ロンドンにおける銀価格と銅価格の推移」というのがあります。これは銅貨の電気銅1トンあたりのポンド表記で示してあります。第一次世界大戦期には1トンが120ポンドでした。また、銀は1オンスあたりペンス表記となります。この期間で銅の一番高値は120ポンド、それに対して銀は40ポンドほどです。 $(銀貨/銅貨) \times 499.557557453$ で出てきます。

銀表記はペンスで、銅価格は120ポンドを240倍しなければなりません。また1トンは

100 万グラムで、1 オンスですと 31.1035 g なので、それで割ると 499.557557453 という数値がでてきて、これを用いて図 2 を作成しました。

図 2 と 3 の値が違うのは、1930 年 10 月に中国は銀輸出平衡税をかけて、銀を出さないようになります。ですから実際の銅価は銀価格ではきちんとした値がでませんので、これ以降はポンド建てになっているロンドンの銅価をペンスと元の相場で、元でいくぐらいになるか、算出することにしました。1934 年 9 月時点では 400 ほどで、図 2 と 3 は厳密に言えば繋がっています。

1934 年 10 月時点では 26.753 ポンド/トン、そして 16.875 ペンス/元です。ポンドを 240 倍して、それをペンスで割ります。1 トンを 100 万グラム、銀 1 元=23.4993448 g として理論値をもとめました。それによると 1934 年 10 月の理論値は 409.7176 枚となり、上海に比べると実質価値が小さくなります。その時は銅貨を作ると銀が出ます。1935 年 10 月の上海ですと 335 枚になり、1 枚に含まれる価値は 309 枚になります。この時期から元が下落し、それに合わせるかのごとく、銅の価値が上がります。

馬場：

理論値が変わってくるその変動要因はなんでしょうか。

岡崎：

図 2 では銀価格と銅価格が別で、二つは微妙にずれて上下します。1934 年 9 月以前、中国は銀本位制ですが、厳密に言うと銀と元とではタイムラグが生じます。タイムラグが生じるため最低取引に銀が動いたり、為替ではらうことになります。ロンドンの銀と銅価格から図 2 のように算出しています。変動値はこのように下落傾向にあり、微妙にずれた動きをしています。

馬場：

変動要因はロンドン市場の銀、元相場だけでしょうか。

岡崎：

ロンドンだけではなく、ニューヨーク市場などもあると思います。ただロンドンはその当時の銀市場の中心で、また大英帝国で銅も重要視していたということでロンドンを参考値にしました。黒田先生はアメリカの銅貨を用いられています。

馬場：

ロンドン市場の銀・銅銭比価が理論値のもとになって変動するというので、結論的にいうと国際的な銀・銅比価を反映しているというわけですね。

今日の話では国民政府の下で銅の補助貨幣という足かせから自由になっていくというこ

とでした。今回とは直接関係ありませんが、では華北政務委員会の聯銀券が法幣に対抗する場合、補助貨幣はどうしていたのでしょうか。象徴的に法幣を使わないようにして、補助貨幣はそのまま使っていたのでしょうか。

岡崎：

注 21 に提示しています『中国地方志経済資料匯編』の金融関係の部分を見ると、1938年の段階で銅元はどれも退蔵されていて、払底しているようです。1元以下は銅貨ではなかなか無くて、紙で輔幣券を使うか、もしくは物価が上がってしまい1元が最低ラインになったかのどちらかだと思います。縣市レベルだとそうなると思います。そもそも上海の後背地でも1937年9、10月に銅元は退蔵されているという話が新報にも出てきます。日中戦争期に入ると銅貨はあまり出回らなくなりました。銅貨は実物なので価値があると中国の方は考えていたようです。これについては、外交史料館に所蔵されている1936年ごろの『中国幣制改革関係雑件』に、日本人の視点として書かれています。銅貨は実物で価値があり、少額銅貨の需要が高いと。日中戦争が始まると退蔵されてしまい、出てこなくなります。銅は銃弾や銃の帯などにも使われていたようなので、需要はあったようです。

森：

1933年に廢兩改元が行われ、銀貨を重量ではなく、名目金額で流通させます。それも補助貨幣の流通に影響を及ぼしたと思いますが、今日の報告ではそのあたりについて指摘されませんでした。なぜでしょうか。

岡崎：

ご指摘された廢量改元については、本来ならば2章と3章の間に入れるべきでした。それは今後の課題とさせていただきます。

森：

廢量改元があつて、35年の秋に法幣発行をおこない、純粋な管理通貨へ移行していくわけですね。そうすると補助通貨が銅貨である必要性はなく、理論的には紙幣にしてしまつてよいはず。所有者は地金の価値があつた方がよいと思うかもしれませんが、商銀行輔幣券の大量発行があり、四大銀行もそうした補助紙幣を出して行くのではないのでしょうか。

岡崎：

大量に出していきます。例えば中国農民銀行は1億元だしています。中央銀行などもだしていきます。ただし、地方的に足りない部分を商銀行が補うかたちで、2角、5角などが出されました。一部、中央造幣省が銅貨でだしていました。ただ1分紙幣は作らないので、

その部分だけを造幣省がつくるようにしたかったのでしょうか。最終的に銅貨は鋳つぶされ、退蔵され、1角以上が残り、やがて1角以上も無くなって、法幣だけになっていきます。1940年以降は先生がおっしゃるように、理論的に紙だけになっていきます。

森：

地方軍閥が発行していた通貨の中で少額通貨を紙幣で発行するのは、法幣が出る前からかなりあったと思います。ですから論文では補助貨幣としての硬貨の流通と並行して、補助紙幣がどのように流通していたのか、その比較を同時にしなければ補助貨幣の位置付けがはっきりしないのではないのでしょうか。

岡崎：

その通りだと思います。廃量改元から幣制改革における補助紙幣と補助貨幣についての言及が足りないので、その部分はずめていきたいと思っています。

森：

1910～30年代の少額貨幣と言う場合、これは銅貨と紙幣の両方を含むはずですね。

岡崎：

はい。輔幣券が重要になっていきます。

森：

輔幣券という言い方は、いつから使われるのでしょうか。

岡崎：

1920年代からです。中国銀行が1角や2角輔幣券を出します。

菊池：

銀錢比価と銅錢比価は同じではないのでしょうか。

江西省、広東省、貴州省、雲南省には地方雑券が1938年まで残っています。はじめは農業銀行以外の三大銀行で法幣を出しますが、地方軍閥が次から次へと出します。北の方では民間四大銀行の中南、塩業、大陸、金城がだしています。1935年11月の段階を、簡単にそこでまとまっただと考えない方がよいのではないのでしょうか。ポンドとドルにむすびつけ、国際通貨として成り立たせるようにして、下支えをする。そして日本の聯銀券や儲備券を排斥していくという形だと思います。

聯銀券の問題は、はじめは日銀券と結び付けようとしたもののインフレになるので、朝鮮銀行券と結び付けます。ところが朝鮮銀行券は日銀と結び付いているので、結局のどこ



ろ聯銀券を出せば出すほどインフレになるということが発覚し、切り捨ててしまった。そのため価値が無いお金となり、銅貨を排斥して紙幣に変えていくことになりました。ただ聯銀券と儲備券はどちらがうのかよくわかりません。

岡崎：

儲備券は最終的に日銀がファイナンスする以外ないです。

菊池：

占領地区ですが価値がどんどん下がって、価値が無くなってしまっています。儲備券は聯銀券よりも強いという話があります。そのあたりの関係はよくわかりません。

岡崎：

柴田さんがそのあたりのことを論文で少し書いていらっしやったと思います。

菊池：

今回の場合、幣制改革はきっかけだけにして捉えた方が良いと思います。

質問は、銀錢比価と銅錢比価は同じではないでしょうか。黒田先生は同じだと言っています。もう 1 つは総量としてどのくらい出していたのか、またその内、四大銀行の割合はどのくらいなのでしょう。

岡崎：

銀錢比価と銅錢比価は同じであるはずなのですが、表をつくってみると同じではなく、相関関係になりません。1931年9月からは同じように推移しますが、それ以前は違っており、それがなぜなのか、今、考えています。

菊池：

錢には銅だけではなく、他のものが含まれているのではないのでしょうか。

岡崎：

他のものが含まれているとはいえ、銅貨の9割は銅です。残り1割は亜鉛や錫です。1920年代までは銅貨需要がすごく高いですが、1926、7年以降は銅貨需要が低くなり、銅の方の価値が上がっていきます。

森：

粗悪通貨ですと、ある程度名目通貨として流通するという側面もあるのではないでしょ

うか。庶民にすれば指標もありませんし、銅の価値を知っているわけではないので。価値を知っている人が買い占めて、退蔵するわけです。

岡崎：

ひょっとしたら 1927～31 年までは輔幣券が流通したせいで、銭価が下がっているのかもしれない。

森：

銅貨を作る場合、ある程度名目的に作って、実際は補助紙幣でもって流通させるという側面もあるのではないのでしょうか。明治政府が金貨を作った時も名目的に少しだけ作って、実際にはあまり流通していません。共産党も銀貨を象徴的に作っています。そういう錯覚があるから通貨の悪鑄というのはうまみがあると思います。あまり露骨にするとばれてしまいがちですが。

岡崎：

20 文とか 50 文とか露骨に作るので、出すとすぐに割引されて物価があがっていきます。四川省だと 27,600 文とかとんでもない数字になっています。

森：

傀儡紙幣の中でも、蒙疆銀行券だけは戦争が終わるまでかなりの価値を維持していました。それは蒙疆管内における貿易為替を非常に厳格に統制して、しかも同時に輸出入の統制、物価の統制もしました。また恒常的に中国の他地域との間で輸出超過であったという条件の下で、戦争が終わったあとも流通して重宝したそうです。

岡崎：

四川省で軍閥が発行したお金が暴落するのは、戦争をすると四川は武器や弾薬を買わなければならない、大赤字になってしまい、そうしたところから掘り崩されるようです。

森：

紙幣価値を維持するためには、その地域では地域の通貨だけが流通し、他地域の通貨が流通しないようにしなければ、価値は維持できません。聯銀券や儲備券がだめなのは、法幣などもたくさん流通しており、そういう条件がないからだめだと思います。

馬場：

山東でも法幣を駆逐して聯銀券をだそうとしますが、なかなか流通せず旧弊をつかっています。この旧弊がなにか前から気になっています。1941～42 年なので、その段階では法

幣なのかと考えたりしています。また華北ではたびたび飢饉がおこり、日本の統治下ですら農作物流通が滞り、物価が上昇して、聯銀券の価値維持ができなくなります。共産党は最初、聯銀券を入れないようにして、法幣を維持しようと考えますが、自分のところを出している辺幣を入れて、法幣も入れなくなり、辺幣だけで統制するようになります。

岡崎：

山東民生銀行がなにか輔幣券をだしているはずですが。30年代、幣制改革以後も出しています。旧幣がその可能性もあるかと思います。

菊池：

発表では幣制改革で貨幣が統一されたようにおっしゃったので、軍閥などの紙幣が無くなってしまったようにみえます。しかし実際は雑多に様々な種類がまだ存在しており、それが徐々になくなっていったわけですね。山東省や華北にも残ったと思います。法幣をいれないところもありました。

岡崎：

残っています。特に一番たくさん残ったのは広東省でかなりの額が残ります。

森：

地方軍閥は法幣ではなく、自分の影響下の銀行で紙幣をだすわけですね。法幣が支配的通貨になったのは南京国民政府の影響力が及んでいる地域だけです。チャハル省における蒙疆銀行券による幣制統一の資料を見ますと、チャハル商業銀行券というのが7~8割を占め、あとはさまざまな通貨が流通しています。冀察政権では法幣はごくわずかししか流通していないのではないのでしょうか。冀のことは調べていませんが、チャハル省については、法幣はごくわずかです。

岡崎：

冀の方には法幣が入っていたようです。

森：

冀東政権では何が流通していたのでしょうか。

岡崎：

冀東銀行が出しているものです。

森：

満州銀行券も相当ありますね。

岡崎：

そうですね。ただ、満州で幣制改革をしたときに銅貨が相当余って、それが 1933、34 年ごろ天津へ大量に流れて、天津の銅価が暴落しています。

菊池：

銅は抗日戦争がはじまると暴騰します。電線、大砲や火薬など戦争で必要になります。

馬場：

根拠地では武器になるため、日本軍が封鎖して銅を入れさせないようにしたそうです。

大野：

都市部のトラムやバスで支払う時は何で支払ったのでしょうか。昔の貨幣や紙幣は使えたのでしょうか。

岡崎：

上海のチンチン電車などでは、銅貨を使っていたました。その為 1 割ぐらいの銅貨がそこに集積していたようです。紙幣は高額でお釣りが出ないため、使わなかったと思います。

大野：

武漢のバスの場合、硬貨で支払っていたという話を新聞で見たことがあります。別の都市でも硬貨を使っているのですね。

岡崎：

圧倒的に硬貨のようです。

森：

孫文銀元は中華民国臨時政府ができてからすぐに作ったのでしょうか。

岡崎：

孫文銀元は 1927 年に国民政府ができてからで、それまでは袁世凱銀元です。

森：

蒋介石をかたどった硬貨は蒋介石が生きていたときからあったのでしょうか。

杜：

いつからかは分かりませんが、すくなくとも 80 年代の 1 元は蒋介石でした。いまでも 1 元には蒋介石が彫られています。

岡崎：

中央銀行券には孫文の顔が書かれていますね。